

日本セーフティプロモーション学会

第16回学術大会

～人と動物の関係から安全を考える～

プログラム・抄録集



酪農学園大学正門白樺通り

- 会 期 2022(令和4)年10月29日(土)・30日(日)
- 会 場 酪農学園大学 A3号館2階
- 主 催 日本セーフティプロモーション学会
- 大会長 酪農学園大学 教授 須賀朋子

ご挨拶

日本セーフティプロモーション学会第16回学術大会を、北の大地、北海道江別市、酪農学園大学で開催させていただくことになりました。

感謝申し上げます。

酪農学園大学は、農学・食品・環境を学ぶための農食環境学群と、獣医学、獣医保健看護学を学ぶための獣医学群の2学群を持つ、動物と自然と人が共存して、学びを深めています。

本学の特色も生かして、**大会のテーマを「人と動物の関係から安全を考える」**といたしました。

日本セーフティプロモーション学会は、行政、市民、企業など様々な主体が協働し、安全に安心して暮らせるまちづくりを推進することを学会の趣旨としています。そこで、本大会は、北海道民カレッジと共催し、「教育講演」の部分を、無料での一般公開に致しました。そして、日本セーフティプロモーション学会の活動を、北海道で広げていきたいと思っています。

「教育講演1」では、酪農学園大学 農食環境学群 森田茂教授から、乳牛の管理方法により、牛乳の美味しさが変わってくるお話など、人と動物の健康・安全を考える、とても先進的な講演となります。

「教育講演2」では酪農学園大学獣医学群 川添敏弘教授から、災害時のペットのシェルターメディスンの講話、酪農学園大学での動物シェルターのお話があります。

大学の正門前の白樺並木、サイドには乳牛が放牧されているという、北海道ならではの会場で、皆様にお会いできることを楽しみにしております。

本大会は、多くの方々のご参加、ご講演、ご発表により、開催に至ることができました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

第16回学術大会長 須賀 朋子
(酪農学園大学 教授)

目 次

学術大会プログラム	1
大会参加のご案内	4
教育講演1 「人と家畜相互の信頼と恐れに基づく洗練された家畜管理技術の普及」 森田 茂 酪農学園大学 農食環境学群 教授	7
教育講演2 「シェルターメディスンと動物との共生社会づくり」 川添敏弘 酪農学園大学 獣医学群 教授	9
一般口演	
1. 学校安全点検に関する児童生徒の意識、参加と家庭・地域との関連性 水野安伸、他	11
2. 児童生徒に対する安全点検の指導可能性及びその関連要因： 小・中学校教員対象の質問紙調査結果より 西岡伸紀、他	12
3. 大学コミュニティ防災における現状課題の分析と防災リテラシー醸成の提言 後藤徹寛	13
4. 欧州の遊び場のリスクマネジメントの実践から考察した遊び場安全管理の在り方 松野敬子	15
5. 国際会議を通じて垣間見る世界のセーフコミュニティ活動の現状 反町吉秀	17
6. 予防安全学から見た「人と動物」 石附 弘	18
7. 中途障害者の生きづらさと生きる意欲への支援 ー性差による比較ー 徳珍温子	19

8. 米国のDVとペットの関係性の調査結果と、日本のDVシェルターへのインタビュー調査	須賀朋子……………	21
9. 獣医学生と獣医保健看護学生のWAIS-IV知能検査結果による知能特性の推測 —知的ギフトとみられる群が安全な医療を促進するために—	柿崎優希、他…	22
10. 幼児の家庭内事故を防ぐための危険予知トレーニング講習会の実施と評価	鶴 有希、他…	23
11. 乳幼児の親子を対象とした救命処置技術講習会の実施と評価	牧田靖子、他…	25
12. 未就学児施設における事故の傾向 —過去5年間の死亡と負傷等の事故報告集計を用いて—	板東利枝、他…	27
謝 辞、第16回学術大会実行委員	……………	28

学術大会プログラム

10月29日（土） 学術大会 1日目

12:00-13:30 日本セーフティプロモーション学会 理事会（A3号館）

13:00-14:00 受付

13:50-14:00 開会のご挨拶

大会テーマ「人と動物の関係から安全を考える」

大会長 須賀朋子 酪農学園大学 教授

14:00-15:00 **【教育講演1】** 座長：東京大学 名誉教授 衛藤 隆
演題：人と家畜相互の信頼と恐れに基づく洗練された家畜管理
講師：森田 茂 先生 酪農学園大学 農食環境学群 教授

<質疑応答5分>

15:20-16:20 **【教育講演2】** 座長：筑波大学 教授 市川政雄
演題：シェルターメディスンと動物との共生社会づくり
講師：川添敏弘 先生 酪農学園大学 獣医学群 教授

<質疑応答5分>

16:30-17:30 日本セーフティプロモーション学会 定例総会

18:00-20:00 懇親会 会場:徳寿 野幌店
(17:45に酪農学園大学に迎えのバスが来ます。)

10月30日（日） 学術大会 2日目

【一般口演】

9:00-9:45

セクション1 大学コミュニティ防災、学校安全

(座長：藤田大輔)

1. 学校安全点検に関する児童生徒の意識、参加と家庭・地域との関連性
水野安伸、他 横浜市立都田西小学校
2. 児童生徒に対する安全点検の指導可能性及びその関連要因：
小・中学校教員対象の質問紙調査結果より
西岡伸紀、他 兵庫教育大学大学院
3. 大学コミュニティ防災における現状課題の分析と防災リテラシー醸成の提言
後藤徹寛 九州大学（オンライン発表）

9:45-10:15

セクション2 セーフコミュニティ、安全学 (座長：後藤健介)

4. 欧州の遊び場のリスクマネジメントの実践から考察した遊び場安全管理の在り方
松野敬子 いんふぁんとroomサクランボ 代表理事
5. 国際会議を通じて垣間見る世界のセーフコミュニティ活動の現状
反町吉秀 青森県立保健大学
6. 予防安全学から見た「人と動物」
石附 弘 日本市民安全学会長

10:15-10:25

<10分間休憩>

10:25-11:10

セクション3 暴力予防、障害特性 (座長：境原三津夫)

7. 中途障害者の生きづらさと生きる意欲への支援
ー性差による比較ー
徳珍温子 大阪親愛学院短期大学
8. 米国のDVとペットの関係性の調査結果と、日本のDVシェルターへのインタビュー調査
須賀朋子 酪農学園大学
9. 獣医学生と獣医保健看護学生のWAIS-IV知能検査結果による知能特性の推測ー知的ギフトとみられる群が安全な医療を促進するためにー
柿崎優希、他 酪農学園大学

11:10-11:55

セッション4 乳幼児の事故

(座長：稲坂 恵)

10. 幼児の家庭内事故を防ぐための危険予知トレーニング講習会の実施と評価

鶴 有希、他 砂川市立病院看護部

11. 乳幼児の親子を対象とした救命処置技術講習会の実施と評価

牧田靖子、他 札幌市立大学看護学部

12. 未就学児施設における事故の傾向

ー過去5年間の死亡と負傷等の事故報告集計を用いてー

板東利枝、他 日本赤十字秋田看護大学大学院共同看護学専攻

大会参加のご案内

1. 参加受付

- 1) 参加者把握のため、受付で記帳をお願い致します。
- 2) 当日参加費は、受付をお願い致します。
- 3) 事前参加申込書：学術大会ホームページからダウンロードできます。
送付先アドレス：tsuga@rakuno.ac.jp
参加受付期間：9月1日（木）～10月25日（火）
- 4) 10月29日（土）の学術大会教育講演（市民公開講座）の参加費は無料です。
10月30日（日）の学術大会一般口演は、参加費が必要です。
※参加費の振込をもって参加登録完了といたします。

	事前参加費	当日参加費
学会員	4,000円	5,000円
学会員以外の方	5,000円	6,000円
高校生・大学生	無料	無料

5) 懇親会

日 時：令和4年10月29日（土） 18:00-20:00
会 場：徳寿 野幌店（江別市幸町11-2 TEL 011-383-8929）
懇親会費：5,000円（お店が予約制のため、当日参加はできません）
懇親会申込み：10月25日（火）まで
送迎バス：17:45 酪農学園大学に迎えが来ます。
懇親会終了後、JR大麻駅までお送りします。

6) 会費・懇親会費振込先

北洋銀行 野幌中央支店 店番496 普通口座4469477
口座名義 日本セーフティプロモーション学会第16回学術大会
代表者 須賀朋子

7) 札幌駅周辺のホテルが酪農学園大学への移動に便利です。

JR札幌駅からJR大麻駅まで、JR函館本線で15分、快速は停車します。
JR大麻駅南口で下車し、大学まで徒歩15分。

2. 現地参加の皆様へ

- 1) 講演の録画・録音・写真撮影はご遠慮ください。
- 2) 質疑応答の際は、挙手され、座長の指名を受けた後に発言してください。

3. ZOOM参加の皆様へ

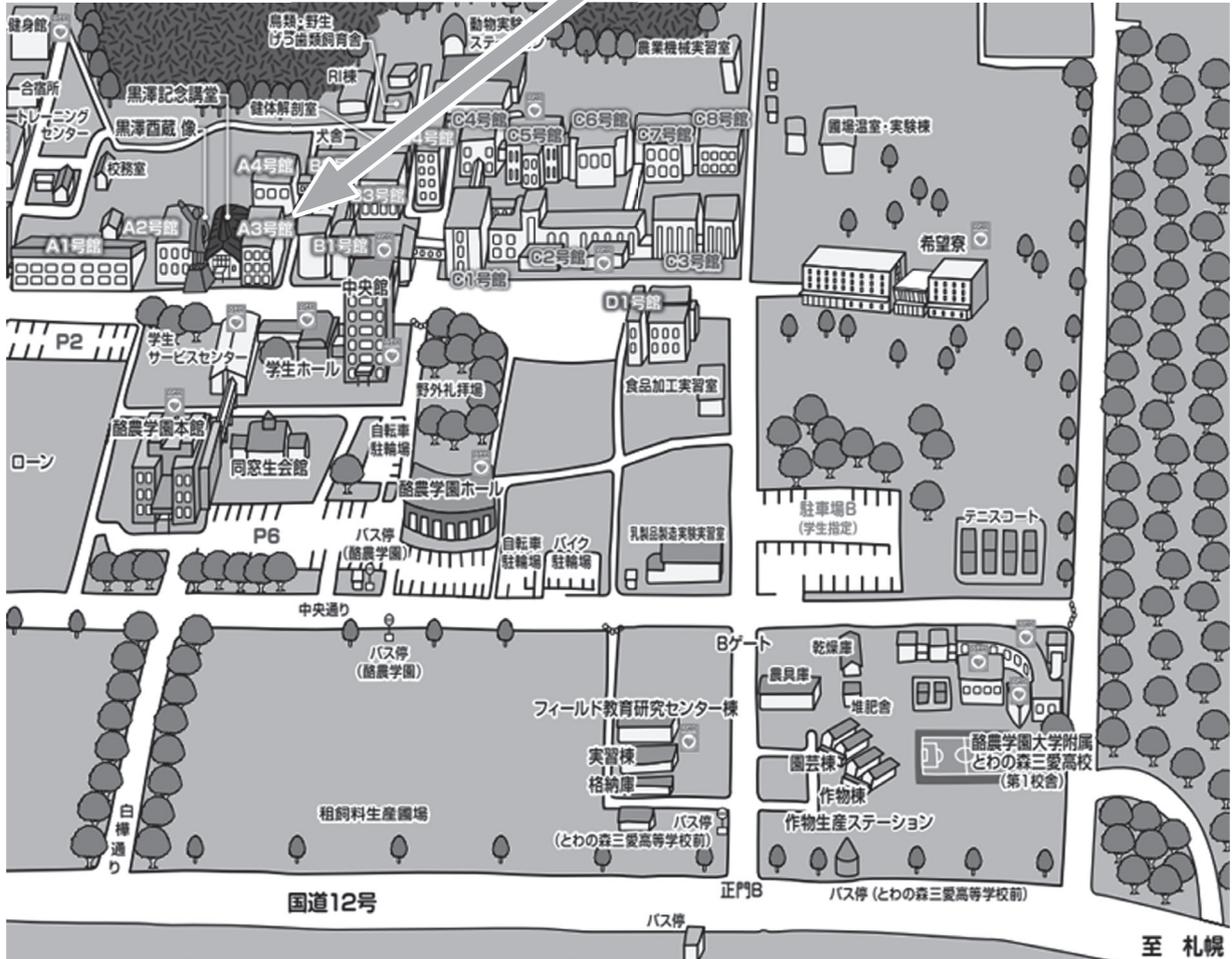
- 1) 大会の様子は、ZOOMで同時配信いたします。
- 2) ZOOM接続用のURLは、参加申込書中のメールアドレスへお送りいたします。
- 3) 大会聴講は、マイク、カメラをオフにお願いします。
- 4) 質疑応答の際には、マイク、カメラをオンにして、座長の指示に従って質問、意見交換等をお願い致します。

4. 一般口演発表者の皆様

- 1) 持参されたパワーポイントは、29日(土)の開会前、及び閉会后、30日(日) 8:30~9:00の間に、演壇上のノートパソコンにコピーし、作動確認をお願い致します。大会終了後、パワーポイント原稿は、実行委員会が消去致します。
- 2) 発表時間は10分(9分で1鈴、10分で2鈴)。質疑応答は5分(3鈴)です。
- 3) 発表が近づきましたら、演壇の近くへ移動をお願い致します。
- 4) 当日、資料を配布される方は30部~50部程度ご持参ください。

会場案内

JR函館線 大森駅南口から A3号館までの道のり（徒歩15分）



大森駅南口から左方向に酪農学園大学は見えます。

人と家畜相互の信頼と恐れに基づく洗練された家畜管理技術の普及

森田 茂

酪農学園大学 農食環境学群教授

動物を飼う人の能力や技能のことを、ストックマンシップと呼ぶ。この能力・技能には、動物を取り扱う方法だけでなく、飼料給与や繁殖、あるいは衛生管理など、動物に直接影響する管理方法が含まれる。特に、飼料給与は人との絆を作るのに影響の強い作業である。最近では、搾乳作業や子牛への哺乳などにおいて、畜産現場での自動化が進む。一方で、自動化されていない作業も多く、その際の家畜の反応は人との絆によって変化する。家畜管理学とは、高いストックマンシップを習得するための、かなりワクワクする学びである。

適切な家畜と人の絆（＝家畜と人の間の良好な関係）を形成すれば、家畜の反応は穏やかになり、家畜の生産性が高まることが判っている。また、体格や動作速度が、私たちと大きく異なる家畜を扱う作業では、適切な絆の形成により、作業の安全性は高くなる。このように人と家畜の絆は洗練された家畜管理技術の基本であり、私たちも家畜も、畜産現場において、互いに常に求めているポイントである。

イギリスの家畜福祉評議会 (FAWC) は、ストックマンシップを「管理の知識」、「管理の技能」および「個人の資質」の3つの要素からなるとした。管理の知識とは、「家畜の生き物としての特性に関する知識および家畜を管理する適切な知識」のことである。このうち、動物の特性の理解は、動物を対象とした管理の知識の大きな部分を占める。まさに、「敵を知り、己を知れば、百戦危うからず」とか、「学びて、ときにこれを習う、またよろこばしからずや。」の境地である。これが出発点となる。

この講演でも、牛という生き物の特徴（感覚器）のうち、見え方や聞え方について、私たちと同じこと・違うことを出発点に説明を始める。次に、他個体に対する行動（敵対行動・親和行動）および個体の空間分布（どこに居る？）から、牛にとって同種個体との関係、つまり牛同士が作る社会を解説する。こうした牛の社会性は、群れで飼う家畜では、管理の仕方の随所に活かされている。

人と牛の関係については、「人を恐れる・逃避することに基づく飼養管理（フライトゾーン Flight zone）」、「恐れ欠如（高すぎる親和性）による作業上の問題（模擬闘争行動）」、および「人と牛の親和度の測定法」を解説する。実際の畜産農家での実験結果を例に、牛が人との関係を構築する仕組みを考察する。例えば、哺乳時期（体重50kgの子牛時期）の人との接触程度の差異による、搾乳牛（650kg）となった時の、人との親和性の違いは、管理作業の種類ごとに影響を及ぼす。かならずしも親和度が高いことが良いわけではなく、ちょうどよい関係（恐れと信頼のバランス）が、子牛の育て方の目標となる。

最後に、牛のことをさらに理解するために、牛が使う施設・設備の工夫、動物の悩みや苦しみへの動物自身の対応・私たち管理者の対応を説明する。これらの動物への

配慮をもとに動物と暮らすこと（アニマルウエルフェアに基づく飼養管理）で、動物との生活が、私たちにとって、もっと、もっと楽しくなることを示す。自分も家畜も、ともにハッピーになることで、酪農・畜産業の持続性は高まると結論する。

森田 茂 教授

ご略歴

博士（農学）北海道大学

北海道大学農学部卒業、同大学院農学研究科畜産学専攻修了

1985年から酪農学園大学助手、1995年助教授、2004年～教授

この間、学内業務では酪農学科長、教育センター長などを歴任

シェルターメディスンと動物との共生社会づくり

川添敏弘

酪農学園大学 獣医学群教授

「シェルターメディスン」という言葉は耳にしたことがない方が多いと思います。日本語では「群管理獣医療」と訳されるようですが、文字だけでは分かりにくい感じですが、現在、社会の中で人と動物の関係が発展し深まっていく中で、様々な問題が生じており、それを学術的に解決しようとする実践的な領域がシェルターメディスンになります。

家畜は群れで飼育されることが多く、予防獣医学が発展してきました。現在ではワンヘルスという、人と環境、そして動物が繋がっているという概念が浸透してきています。しかし、ペットでは群管理を前提とする獣医学的視点は注目されることはありませんでした。ところが現在では、人と動物が関係する社会問題が明らかになり、2020年に動物愛護管理法が施行されることで動物の適正飼養に関する法的規制が厳しくなるなど関心が高まっています。

東日本大震災では、家に残してきたペットを救うために、放射能が残るなか多くの飼い主が禁止区域に侵入していきました。豪雨による河川の氾濫が生じると複数の犬猫を飼育している人たちの避難が遅れることが明らかになりました。地震や火山の噴火などでの広域災害では、ペットと一緒に避難場所で過ごすことができず車中泊による情報の欠落や避難民同士でのトラブルが問題となりました。そして、動物愛護センター（または保健所）で保護されている動物たちの殺処分の問題も、いまだ道半ばです。

私たちは起こるであろう災害を意識してペットを飼育できているのでしょうか。日本人は犬を擬人化し可愛がる傾向にあります。例えば、1匹ではかわいそうだと2匹飼育し、子どもが生まれ多頭飼育崩壊へと進むこともあります。多頭飼育崩壊を起こす飼い主のなかには認知能力が低下している方がいます。これらの中には福祉行政の関与が必要なケースもあります。また、動物への福祉的配慮が守られていないブリーダーも多くいます。ペットブームの頃に金儲けで開始したブリーダーが高齢になり、飼育現場が崩壊している件数も増えています。

日本では、「動物愛護」の前に必要な「適正飼養管理」が疎かになる人が欧米と比較して多いとされています。そのために様々な社会問題が起きています。これらを解決していく実践的な学問が「シェルターメディスン」になります。今回は「殺処分ゼロ」を切り口に、酪農学園大学で取り組んでいる事例も紹介していきたいと思えます。

川添敏弘 教授

ご略歴

博士（学術）横浜国立大学

酪農学園大学 獣医学科卒業（獣医師）

東京家政大学大学院心理教育学科を修了し、臨床心理士、公認心理師の資格を取得。

横浜国立大学環境情報学府にて、博士課程を修了

東京家政大学助教、ヤマザキ学園大学動物看護学部准教授、

倉敷芸術科学大学動物生命学科教授を経て、

2021年4月より酪農学園大学獣医学群教授

2022年4月より酪農学園大学獣医学群獣医保健看護学類長

学校内安全点検に関する児童生徒の意識、 参加と家庭・地域との関連性

水野安伸¹⁾、西岡伸紀²⁾、村上佳司³⁾、柴田真裕³⁾

¹⁾ 横浜市立都田西小学校、²⁾ 兵庫教育大学大学院、³⁾ 桃山学院教育大学

1. 緒言

児童生徒の安全管理の実践は、学校の安全だけでなく家庭、地域における安全管理にも貢献できることが期待でき、そのためには、安全点検の視点、危険箇所の発見、発見時の対応方法など、安全点検に関する学習内容を確立させることが求められる。そこで、本研究では、学校安全点検のプロセスを効果的に学習するためのプログラムを開発する基礎資料を得ることを目的とした。

2. 方法

2021年8月17日～10月2日に、5都道府県の小学5、6年生児童210名、中学生268名を対象にGoogle Formを用いたWebアンケートを実施した。

アンケート内容は、教員による安全点検に対する児童生徒の認知や意識、安全点検から学習した経験・学習内容、安全点検への参加と日常生活への関連についての計23項目とした。

3. 結果

1) 校内安全マップづくりの経験と地域や家庭での安全管理の関連

マップづくりの経験がある児童生徒のうち中学生においては、地域での安全管理に対して有意に高い肯定的な回答が見られた。

2) 安全点検への参加意欲と地域や家庭での安全意識の関連

今後、安全点検を行う機会があれば参加したいと回答した児童生徒は、地域においても、家庭においても安全意識が有意に高い肯定的回答が見られた。

3) 安全点検の経験と地域や家庭での安全意識の関連

安全点検を行った経験がある児童生徒と地域や家庭での安全意識との関連性は、ほとんど見られなかった。

4. 考察

安全点検への参加意思がある児童生徒と地域や家庭の安全に関するすべての質問に対して有意な肯定的回答が見られたことから、安全点検を実施すれば地域や家庭においてもその経験を発揮できると意識していることが分かった。

一方でマップづくりの経験と地域の関連は、中学生のみが肯定的な回答に有意差が見られた。また、安全点検に参加した児童生徒でも、地域や家庭の安全意識において有意な関連がほとんど見られない。

このことから、校内の安全マップづくりを含む安全点検に関わる指導については、地域や家庭での安全への意識が高められるように工夫が必要である。

*JR西日本あんしん社会財団の研究助成（助成番号：21R041）

児童生徒に対する安全点検の指導可能性及びその関連要因： 小・中学校教員対象の質問紙調査結果より

西岡伸紀¹⁾、村上佳司²⁾、柴田真裕²⁾、水野安伸³⁾

¹⁾ 兵庫教育大学大学院、²⁾ 桃山学院教育大学、³⁾ 横浜市立都田西小学校

1. 緒言

「教職員による学校安全点検のプロセスを小・中学生が学習する」プログラムの開発の基礎的情報を得るために、教員対象調査により、安全点検の意義、危険予測指導、点検指導等に関する意識、及びその関連要因を明らかにする。

2. 方法

小中学校教員を対象に2022年4～9月に、Google Formによる質問紙調査を実施した（小100人、中278人）。調査内容は、①属性：校種、性別、職種、勤務年数等、②学校安全関連特性（学校安全担当、児童生徒の安全点検参加等の経験）、③児童生徒による安全点検の意義や留意点（7項目、以下、安全点検の意義等）、危険予測の指導と事後対応（4項目、以下、危険予測指導）、児童生徒による安全点検の指導の要件、意義、方法等（15項目、以下、安全点検指導）、児童生徒の場所別危険発見の可能性（11項目、以下、場所別危険発見）とした。

3. 結果

1) 実態：安全点検の意義等については、児童生徒が安全点検を行うことの意義や実施上の留意点のほとんどの各項目で、肯定の割合は85%以上であった。一方、「児童生徒は危険発見時に必ず知らせる」の肯定は65%であった。危険予測指導についても概ね肯定的であったが、「危険個所に対する気づき方を具体的に指導」は50%であった。安全点検指導については、「安全点検授業の見聞経験有り」は25%、「安全点検の指導内容が明確」は35%に留まった。一方、「危険予測指導への点検の関連付け」「点検実習・グループワーク・意見交換等の指導方法が必要」「実技系授業や部活動で安全点検を実施」等には概ね90%以上が肯定した。

場所別危険発見については、児童生徒の発見の可能性が高い場所は、①教室、廊下、階段、体育館、②特別教室、運動場、倉庫、有害動物、③プールであった。

2) 関連要因：安全点検の意義等、危険予測指導、安全点検指導、場所別危険発見の多くの項目に有意に関連する要因は、「児童生徒の安全点検参加経験」「点検授業の見聞経験」であった。教員の属性はほとんど関連しなかった。

4. 考察

教員は、児童生徒に安全点検を指導することに概ね肯定的であった。また関連要因から、安全点検指導を促すためには、児童生徒の安全点検参加経験、点検授業の実践に関する情報提供が必要と判断された。

* 本研究はJR西日本安心社会財団研究助成（21R041）を得て実施した。

大学コミュニティ防災における 現状課題の分析と防災リテラシー醸成の提言

後藤 巖寛
九州大学

I. 緒言

近年、日本政府のインバウンド観光戦略や外国人材の受入れ推進によって、外国人の観光客や技能実習生、留学生の数が急増している。一方で、多文化共生や異文化理解が進まず、災害時の避難誘導や避難生活等において様々な問題が表面化しつつある。なかでも留学生や教員ら外国人を数多く抱える大学では、多文化共生社会たるべき環境にあるものの、彼らに対する防災対策や支援が充分であるとは言い難い。対策が急務な多文化共生社会のレジリエンス化を目的に、大勢の外国人留学生を擁す大学の周辺コミュニティにおける地域防災の現状と課題点を論じた。

II. 方法

2018年6月の大阪府北部地震で、ひとつの避難所に大挙避難した大学近隣在住の留学生67人を含む大学生・大学院生と教職員ら大学関係者、避難所運営者である自治体関係者（各地区の防災委員会、社会福祉協議会、国際交流協会などの担当者）ら計124人に、いずれも対面式でのインタビュー調査を実施し、その結果について質的研究手法を用いた談話分析とSWOT分析を行なった。

III. 結果

(1) 留学生による防災意識と地域理解、(2) 地域住民と地区行政関係者による異文化理解、の2つ視点から、コミュニティ防災の実情について分析した結果、現在の状況を表現した想起キーワード群「現況モデル」では、地域住民も留学生らも交流や触れ合う機会が不足していると感じて、相互に相手を未知で、近寄り難い「脅威、不安 (T)」な存在と捉え、地域住民らは語学力の不安から、留学生らに対して「弱み、引け目 (W)」を想起させる発言が多かった。一方、両者が相互理解と協働を意識した「強み (S)」「機会 (O)」などプラス面に想起した群、つまり課題「解決モデル」では、やさしい日本語／多言語化をはじめ、多様な交流機会をプラス要因と捉えた結果となった。

IV. 考察

留学生らが同じ大学近隣に居住し、本来は寄り添い助け合うべき共助存在である地域住民と日常的な接触機会に欠け、相互面識も少ない社会環境の下で良好な関係性を構築し得なかったことと、地域住民らによる多言語対応・異文化理解の不備は、大学コミュニティ防災の重要な課題である。避難訓練の経験や防災知識、すなわち「防災リテラシー」が充分でなかった留学生と異なり、日本に長く居住し、自治体主催の防災・避難訓練などに参加経験がある外国人らは、安全講習の教えや心得を守るなど防災直後に落ち着いて安全行動を取っていたことが判明し、防災リテラシーの重要性が明確になった。頻発する自然災害に対して、防災リテラシーを高める教育や訓練を行

う意義は大きいと考えるとともに、住民向けの異文化理解や多文化共生など国際交流教育の拡充も不可欠である。地域防災への取組みは、当該課題の共有と周知、ならびに連携構築によるレジリエンス強化が求められ、地域社会の牽引役である大学が率先し、国際交流や防災学習の機会を提供することで地域の成熟をもたらす国際教養を身につけることにも繋がると推察する。

V. 結語

著者らは、防災教育の有無が災害時の避難行動に影響する可能性に着目し、留学生ら外国人市民を含む住民が、防災や減災に関する知識や技術を一緒に楽しく学ぶ機会を増やすため、行政や消防と協働で「外国人市民のための防災フェア」「留学生向けセーフティプロモーションWS」「防災体験学習WS」等を開催し、やさしい日本語によるAEDを使った心肺蘇生法（CPR）訓練など、防災リテラシーの醸成に向けた活動を実践中である。今後は本研究成果を活かして、異文化に対する受容力と寛容性の育成を促し、防災計画やハザードマップ等のやさしい日本語／多言語化のほか、防災教育・避難訓練での外国人参画推進など大学コミュニティのレジリエンス強化に繋げたい。

欧州の遊び場のリスクマネジメントの実践から考察した 遊び場安全管理の在り方

松野敬子

(一社) いんふぁんとroomさくらんぼ代表理事、
神戸常盤大学こども教育学部非常勤講師

【緒言】 2002年、国土交通省から我が国初の遊び場の安全規準ともいえる指針が出され、今年で20年になる。この指針は、成長の糧となるチャレンジ可能な「危険」は残しつつも致命傷となる傷害を起こさないという、子どもの遊び場管理の「理想」を示したものとして評価されている。しかし、リスクを残しつつ安全性も担保するという、相反する目的を実現させることは容易なことではない。残念ながら、現在もこの「理想」が実現しているとはいえない。

一方、世界に目をやると、着々とその方法論は確立されつつあり、特に欧州ではリスク・ベネフィットアセスメント（RBA）という手法を用いて実績をあげている。欧州でどのようにRBAが実践されているのかを調査し、我が国の安全管理の課題を考察することを目的とした。

【方法】 欧州公式の検査機関であるRPII（Register of Play Inspectors International：国際遊び場検査士機構）の認証を受けた唯一の日本人精密点検検査技師である弘永元氏にインタビューを行った。RPIIの最高位の精密点検検査士とは、世界に79名しかいない遊び場の安全管理の専門家である。

【結果と考察】 RBAとは、従前のリスクマネジメントのようにリスク（悪い結果）のみをアセスメントするのではなく、リスクを敢えて取った場合のベネフィットにも注目し、リスクとベネフィットのバランスを図りながら遊び場を管理していくアセスメント手法である。ベネフィットとは、遊びにより子どもが得る楽しさや達成感などを指しており、まさに「遊びの価値を考慮しつつ安全性を確保する」ことを目的とした手法である。2008年に英国で提唱されたこの手法は、現在では欧州において遊び場の安全管理の新たな手法として実践されている。

具体的には、EN規格に基づきアセスメントした後、たとえ頻度的には稀であっても許容不可となるリスクを洗い出し、そのリスクに対してベネフィットを下げない方法で対策を提案するというものだ。出色なのは、日本では事故防止対策として多用される「見守りを置く」「年齢制限を設ける」「注意喚起の張り紙」という対策は、遊びのベネフィットを下げる、あるいはリスク低減そのものに効果が小さく効果を維持することも難しいという理由で、基本的には提案しないという。それらの対策は、結局は子どもの行動を制限するばかりで、その効果は管理者のスキルや子どもの行動変容に依存するものでしかないからである、ということだ。

「子どもにとってのベネフィットを下げない」という欧州の遊び場管理を実施するためには、子どもの発達や行動特性を熟知していない限り不可能である。つまり、遊び場の安全管理者に求められる技能は、安全規準の理解や技術的なスキルだけではな

く、「子ども」を知っているといことである。子どもは大人とは異なる特性を持つためリスクが高い。しかし一方で、発達過程である子どもはチャレンジすることにより成長という果実を手にするものだという子どもへの理解が必要だということになる。

我が国の遊び場を、真に子どもにとって有意義なものとするためには、安全管理に対する根本的な思考を変える必要がある。

国際会議を通じて垣間見る世界のセーフコミュニティ活動の現状

反町吉秀

青森県立保健大学社会的包摂・セーフティプロモーション研究室

1989年にWHO Collaborating Centre on Community Safety Promotionがスウェーデンカロリンスカ医科大学に開設されて以降、国際的なセーフコミュニティ活動が展開されてきた。2008年に京都府亀岡市が国内最初の認証を受けるなど、セーフコミュニティ活動は日本においても展開されてきた。日本における活動の現状は、一般社団法人日本セーフコミュニティ推進機構を、ホームページを通じて確認することはできる。しかしながら、世界におけるセーフコミュニティ活動の現状については、その概要を把握することも容易でない。国際的な電子データベースに掲載される学術雑誌に論文として執筆されるのは、セーフコミュニティ活動の一部に過ぎないこともその一因と思われる。

第25回国際・第10回アジアセーフコミュニティ会議が、韓国世宗市で2022年10月13日～14日に開催される。「コミュニティが参加する自殺予防」のセッションのkey note speakerとして、発表者は招聘された。この機会を活用して、同会議における他のシンポジウムや一般発表などにできるだけ参加し、世界におけるセーフコミュニティ活動の現状の概要を把握することにつとめ、その結果を本学会にて活動報告として発表する。

それにより、世界の現状の概要や新しい動きなどを垣間見ることができるのではないかと考えている。

予防安全学から見た「人と動物」

石附 弘
日本市民安全学会長

キーワード：命の同質性（「命」の一回性の原理、運命共同体）、異質生命体（形質・性格・危険回避能力・環境変化対応能力に違い）

1 人と動物の関係（相互の命の安全モデル）

（1）動物王国ムツゴロウ・モデル（極意；動物の特性—接近—友達—調教—動物の喜び）

—語録：怖い気持ちが1ミリでもあれば感応して襲ってきますよ。動物の呼吸がわかるの。見知らぬ犬に「手」を出してはダメで「顔」からの接近がコツ

* [656のはじまり - YouTube](#)（科学と実践・経験からの最適関係性構築のヒント）

（2）新技術を活用した「夢の酪農DX化」

牛にセンサーを取り付けて、動きを3次元で把握し、食べた餌の量や乳量、健康状態のデータなどと統合し、「牛」と「人」の安全・安心環境の最適化を図る

2 環境適応能力の学び

（1）危険予知能力

鳩は、石を投げると、何故逃げることができるのか？

脳のメカニズム 視覚野、運動野、聴覚野、嗅覚野等

（2）感知能力の練磨 環境改善

視覚障害者と聴覚能力の場合、鶏の学習例：放し飼いとブロイラーの違い

安全能力（危険回避能力）は、学習すれば向上させることができる（安全教育の意義）

3 人と動物の衝突

（1）害鳥獣問題

人と動物の利害の衝突（縄張り争い・支配力） 人の生活安全・経済への脅威（人や国家間の、食料・領土を巡る紛争・戦争と基本的に同じ構図か？）

（2）社会問題化した動物虐待

ペット仇討ち事件、ネコ13匹連続殺害 —法改正で重罰化

（3）国際動向

2016.1アメリカ連邦捜査局（FBI）：動物虐待は重大犯罪予兆として取締り強化、犯罪データベース化。豪の警察：性的殺人犯罪者の動物虐待の過去歴100%、動物虐待の9の動機・・・人のいじめ・虐待等と同質の構造？

4 シーボルト・モデル

長崎で可愛がっていた「犬・猿」は、今、どうなったか？

5 まとめ

●「人と動物との関係を知ることは、即ち、人間自身を知ること」

4. 考察とまとめ

男性は共起ネットワークで要因が共起しているのに対し、女性ではクラスターが共起しておらず、同様言葉として「生きづらさ」や「生きる意欲」が示されても、異なる支援方法を検討する必要があると考える。

米国のDVとペットの関係性の調査結果と、 日本のDVシェルターへのインタビュー調査

須賀朋子
酪農学園大学

1. 緒言

米国では、ペットと離れられないことが理由でDV被害者が逃げ遅れてしまう問題から、PALS (People & Animals Living Safely) が、2013年に「人とペットが同時に避難できる施設」を設立した。PALSは、URI (ニューヨーク州が出資している米国、最大のOne stop center) の援助活動の1つである。PALSが、全米のNational Domestic Violence Hotlineと共同して、両者の利用者2,480名に2019年7月～9月にかけて、「ペットと離れられないことが理由で、DV被害から逃れられない」という現状を明らかにするためのアンケート調査を行った¹⁾。13項目のアンケート調査から、DV被害者の49%が「ペットを置いて逃げるわけにはいかない」、91%が「ペットは感情的な支え、守ってくれる存在」と回答した。また、50%の被害者が「ペットを同伴できなければ、シェルターに入ることはあきらめる」と回答した。さらに29%が「加害者がペットを殺したり、傷つけた」と回答している。

2. 方法

米国の大規模調査の結果から、日本も同じような状況があるかを明らかにするために、DVシェルターの施設長 (北海道内の3施設) に半構造化面接によるインタビュー調査を行った。

3. 結果

ペットと離れられないことが原因でDV被害から抜け出せない人、シェルターに逃げてきたが、すぐに「ペットが心配」で戻ってしまう被害者は多数いることが明らかとなった。また、3施設のなかの札幌の民間DVシェルターは、米国の調査結果と同じ理由で、ペット同伴の物件に引っ越して、ペットと同伴で、シェルターに逃げるができるように手配した。

4. 考察

日本も、米国の調査結果と同じように、DV被害者とペットの感情的な支えが強いこと、対人だけでなく、ペットにも暴力被害が起きていることが示唆された。

【参考文献】

1) PALS. Domestic Violence and Pets: Breaking Barriers to Safety and Healing, 2021, PALS Report and Survey.

*本研究は科学研究費 (若手研究21K17988) の助成を受けて実施した。

獣医学生と獣医保健看護学生の
WAIS-IV知能検査の結果による知能特性の推測
－知的ギフテットとみられる群が安全な医療を促進するために－

柿崎優希、須賀朋子
酪農学園大学

【緒言】「WAIS-IV知能検査は獣医学生の進路選択に役立つか」須賀、栗本（2021）では獣医学生が自分の知能特性を知る事で、自身の得意不得意を知る事ができ、進路の決定に役に立つという事が明らかになった。さらにWAIS-IV知能検査と、インタビュー調査を継続すると、獣医学生の一定数以上に「知的ギフテット」と呼ばれるIQ 130以上の知能が高い群が存在する事が明らかになった。本研究では動物の看護師を目指す獣医保健看護学生のWAIS-IV知能検査の結果と比較し、知的に高い部分を伸ばす事で、人と動物に優しい獣医師になる為の教育について考える。

【方法】国内14の論文、文部科学省、経済産業省の資料より知的ギフテットとは何か、また知的ギフテットの抱える困難について資料から検討した。さらに酪農学園大学獣医学生45名、獣医保健看護学生11名にWAIS-IV知能検査とインタビュー調査を実施した。

【結果】ギフテットには高い知能に加えてOE（Overexcitability）と呼ばれる刺激に対する強い感受性を示すという特徴がある。2E（Twice-Exceptional）と呼ばれるギフテットは高い知能と学習障害（LD）、自閉症スペクトラム（ASD）、注意欠陥多動性障害（AD/HD）を同時にもつ二重に特別な支援を必用とする。それらを踏まえて、獣医学生、獣医保健看護学生のWAIS-IV知能検査の結果を比較すると獣医学生は、獣医保健看護学生よりも平均的に知能が高い傾向にあることが結果として現れた。さらにIQが130以上の学生を抽出すると獣医学生の78%が全検査IQ、言語理解、知覚推理、ワーキングメモリー、処理速度のいずれか、もしくは複数で、IQ130を上回るスコアを記録している事が明らかになった。全検査IQが高い獣医学生に子ども時代のエピソードを訪ねると国内の論文にあるギフテットの事例によく似たエピソードがある事が分かった。

【考察】獣医学生は獣医保健看護学生よりも個人間のIQに、ばらつきが大きい事から、画一的な授業ではついていけない学生が現れる可能性がある。

【結語】知的ギフテットと呼ばれる人が、獣医学生に多くいることから、そのような学生は高い知能とは裏腹にこれまでの学校生活で困り感を抱えることもあっただろう。獣医学生の一部に見られる知的ギフテット群にはそれぞれの知能と、それに付随して起こる可能性の高い困難に対する支援が必要である。

*酪農学園大学 人を対象とする倫理審査委員会18-3の承認を得て実施した。

幼児の家庭内事故を防ぐための 危険予知トレーニング講習会の実施と評価

鶴 有希¹⁾、井戸坂るみ子²⁾、松浦和代³⁾

¹⁾ 砂川市立病院看護部、²⁾ 砂川市子育て支援センター、³⁾ 札幌市立大学看護学部

I. 緒言

不慮の事故（以下、事故）は、常に小児期の死因の上位に位置している。保護者向けの事故防止活動として、母子保健事業を利用した情報提供や消費者庁による情報発信サービス等がある。しかしながら、小児を事故から守るためには、情報提供型の事故防止活動に加えて、周囲の大人が日常に潜む危険を察知できる能力を修得する必要があると考えた。工事現場や医療現場では、職場に潜む危険性や有害性等の危険要因を発見し解決する能力を高める手法として、危険予知トレーニング（以下、KYT）が活用されている。本研究は、保護者や保育士らを対象に、家庭内における幼児の事故防止活動としてKYT講習会を試験的に実施し、その成果を評価することを目的とした。

II. 方法

【対象】 A市ファミリーサポートセンターを利用する幼児の親や保育士。

【KYT講習会の方法】 グループワークとした。導入として、幼児の事故、主な事故の対策、およびKYTについて説明した。導入後、「KYT基礎4ラウンド」（中央労働災害防止協会）に従い、第1ラウンド「現状把握」；幼児がキッチンやリビングで遊んでいる場面の写真をみて危険箇所を指摘し合う、第2ラウンド「本質追究」；危険のポイントを確認する、第3ラウンド「対策樹立」；危険のポイントを解決するための具体的な対策案を出し合う、第4ラウンド「目標設定」；対策案の中から重点実施項目を決め指差し唱和で確認する、で展開した。開催月は2020年12月、所要時間は60分間とした。

【倫理的配慮】 主催施設の倫理的承認を得た。

III. 結果

参加者は6名で、2グループに分けた。第1ラウンドでは、キッチン内6カ所の危険要因とその要因が引き起こす現象が抽出された。第2ラウンドでは、最も危険な現象として戸棚を開けて包丁をさわることが挙げられた。さらに、キッチンを遊び場とすること自体が事故につながるという見解が得られた。第3ラウンドでは、戸棚ロックとキッチン入り口にベビーガード設置という対策案2点が出された。第4ラウンドでは、2点を重点実施項目として「戸棚ロックヨシ!」「ベビーガードヨシ!」の指差し唱和を行った。

IV. 考察

本講習会は60分間と短かったが、KYT基礎4ラウンドを枠組みとしたことによって、幼児の家庭内事故に対する参加者の意識を顕在化し、共有化をはかることができたと評価する。その促進要因としては、幼児の身近にいる大人をリクルートした点、

少人数制のグループワークとした点等が挙げられる。しかし本講習会後に、参加者が日常生活の場でどのような行動変容を起こすかは未知数であり、今後の課題といえる。

V. 結語

KYT基礎4ラウンドは、幼児の家庭内事故を防ぐための講習会の枠組みとして活用しやすく、参加者の問題意識の顕在化と共有化に有効である。

乳幼児の親子を対象とした救命処置技術講習会の実施と評価

牧田靖子、松浦和代
札幌市立大学看護学部

I. 緒言

乳児や小児は、低酸素性/呼吸原性心停止が多いことが特徴であり、一度心停止がおこった場合、最適な蘇生処置を行ったとしても一般に転帰不良である（小児二次救命処置AHAガイドライン2020準拠, p.71, 2020）。一次救命処置の目標は、神経学的後遺症を残さない蘇生である。乳児や小児の急変時には、一次救命処置が速やかに開始されることが望ましい。今回、A市子育て支援センター主催により、保護者を対象とする救命処置技術講習会を演習形式で実施した。本研究は、保護者への救命処置技術講習会の実施状況を把握するとともに、対象者にアンケートを行い、講習会の評価および今後の課題について明らかにすることを目的とした。

II. 方法

【対象】 A市子育て支援センターを利用する親子5組。コロナ禍であったため、対象者数を制限した。【救命処置技術講習会の内容】 講師と向かい合う形で半円形にマットを敷き、間隔を十分に確保した。各対象者にベビー人形1体を用意した。窒息解除人形2体を用意した。講習会の内容は、①呼吸・脈拍の確認、②人工呼吸法、③胸骨圧迫法、④窒息解除法とした。講師による説明とプレゼンテーションの後、対象者が演習を行った。演習中、講師が巡回し実技を指導した。また、紙媒体の資料を対象者に配布した。実施日は2021年11月某日、所要時間は60分間とした。講習会後のアンケートは主催施設が実施した。【倫理的配慮】 主催施設の倫理的承認を得た。

III. 結果

【対象者】 保護者6名、子ども5名であった。子どもの年齢は、1歳未満が2名、1歳代が3名であった。保育士4名の協力があり、必要に応じて子どもに対応した。【実施状況】 ①全員が自分の子どもの呼吸・脈拍を確認できた。②全員がベビー人形を用いて人工呼吸時の口の当て方を確認できた。感染拡大防止の観点から、息の吹込みは実施しなかった。③全員がベビー人形を使用し、胸骨圧迫法を体験できた。④全員が窒息解除人形を用いて叩打法を実施し、飴玉を気道から出すことができた。対象者は演習に集中した。成人の心肺蘇生法の受講経験をもつ対象者から「小児では気道確保、換気が重要だと初めて知った」という総評があった。【アンケート結果】 「実技を修得」5名、「時間配分・所要時間が妥当」3名、「実用的な内容」2名、「実際の遭遇時に動揺しないために復習が必要」2名であった。

IV. 考察

育児中の保護者が参加する講習会として所要時間は60分間が妥当と考える。結果から、演習形式による救命処置技術講習会は保護者のモチベーション向上と実技修得に効果的であった。今後に向けて、①小児の急変が呼吸原性によるものが多いという知識の普及、②実際の遭遇時に動揺しないための復習の機会の提供、が課題である。

V. 結語

演習形式による救命処置技術講習会は、保護者のモチベーション向上と実技修得に効果的である。今後、正確な知識の普及と実技の反復・定着に向けて方法を検討する。

未就学児施設における事故の傾向 －過去5年間の死亡と負傷等の事故報告集計を用いて－

板東利枝¹⁾、山田典子²⁾

¹⁾ 日本赤十字秋田看護大学大学院共同看護学専攻

²⁾ 日本赤十字秋田看護大学看護学部

I. 緒言

共働き世帯の増加や保育ニーズが多様化する中、乳幼児に対して集団保育や教育が行われる未就学児施設の安全管理がこれまで以上に求められている。本研究は過去5年間に内閣府等に報告された全国の未就学施設で発生した事故のうち、死亡と重篤な事故の傾向を明らかにし、乳幼児の傷害予防の実践と研究への示唆を得ることを目的とする。

II. 方法

2016年1月から2020年12月に内閣府等に報告があった全国の教育・保育施設等で発生した死亡事故や治療に30日以上要した負傷や疾病を伴う重篤な事故等（以下、負傷等）をまとめた「教育・保育施設等における事故報告集計」を用いた。事故報告集計より放課後児童クラブで起こった事故を除外し、幼稚園や保育所等の未就学児施設で発生した事故5,573件を分析対象とした。単年度毎に掲載された5年分の集計を積み上げ、死亡件数、死亡の年齢別件数、死因、発生場所、発生状況、負傷等の件数、負傷等の種類別件数、負傷等の年齢別件数について単純集計を行った。

III. 結果

5年間の死亡事故は41件で、2016年13件が最も多く、2020年5件と年々減少傾向である。死亡の年齢別では2歳以下が33件（80.5%）で8割以上を占めている。死因は病死9件（21.9%）、窒息4件（9.8%）、SIDS（乳幼児突然死症候群）1件（2.4%）、その他27件（65.8%）、死亡の発生場所は施設内の室内35件（85.6%）、発生状況は睡眠中28件（68.3%）が最も多い。

一方、5年間の負傷等は5,532件で、種類別では骨折4,422件（79.9%）が最も多い。負傷等の年齢別では年齢が上がるにつれて件数が増加し、4歳以上が3,966件（71.7%）である。

IV. 考察と結語

予防の取り組みや医療技術の進歩により死亡が減少傾向である一方、利用する子どもと施設の増加により報告件数が増加していると考えられる。死亡事故の8割以上が2歳以下で、睡眠中の事故が多いことから、保育士等の十分な人員配置など保育環境の改善が急務である。加えて年長児の負傷等や骨折が多いことから子どもへの予防教育も必要であると考えられる。未就学児施設で子どもが安全に過ごせるよう、保育環境の改善と予防教育を徹底する必要があることが示唆された。

謝辞

本大会の開催にあたり、日本セーフティプロモーション学会役員の皆様、会員の皆様、酪農学園大学教職員、学生の皆様、その他多くの皆様のご協力により開催することができました。ここに第16回学術大会実行委員会として謝意を表します。

実行委員会

須賀朋子	酪農学園大学	教授（大会長）
山田典子	日本赤十字秋田看護大学	教授
境原三津夫	新潟県立看護大学	教授
後藤健介	大阪教育大学	准教授
辻 龍雄	つじ歯科クリニック	院長

日本セーフティプロモーション学会 第16回学術大会 プログラム・抄録集

発行日：2022(令和4)年10月29日

発行者：日本セーフティプロモーション学会 第16回学術大会 実行委員会

代表 須賀朋子

〒069-8501 北海道江別市文京台緑町582番地

印刷：有限会社 三共印刷



～安全・安心を創る科学と実践～